「買上展」に上村豊作品

「桐生再演」で制作「早佐織物工場」

東京芸大美術館

70年の買上制度から厳選され、再構成して展示された上村豊さんの「早佐織物工場」（東京芸術大学大学美術館地下２階で）

場と関わる行為と思想の痕跡

東京芸術大学大学美術館（東京・上野公園）第2部の油画では1994年の「桐生再演」で、明治の東京美術学校から現代までの学生制作品から厳選した「買上（かいあげ）展」が開催されている。日本近代美術史をけん引することになった巨匠たちのデビュー作から、表現方法も多様化した現代の各科首席作品まで、1万件超の中から100点を出品。

第2部の油画では1994年の「桐生再演」で、上村豊さん（1965～2020年）が現地制作した「早佐織物工場」が、関係資料も合わせて展示されている。5月7日まで。

第1部は横山大観や東山魁夷、高村光太郎らの卒業制作や、伝統による青木繁、藤田嗣治、萬鉄五郎らの自画像など、巨匠たちの若き時代が堪能できる。

第2部が昭和28（1953）年から始まり各科の首席卒業と位置付けられる買上作品だ。

油画70年の中から選ばれたのは4点、うち1点が上村作品だが、ノコギリ屋根工場でのサイトスペシフィック・アート（場に帰属する作品や手法）であり、現場を離れての納品や収蔵、そして展示、再現にいたるまで画期的で、「油画」という枠にも問題を提起した。

納められたのは、操業を停止したノコギリ屋根工場の床に蓄積した機械油やほこりをも、丹念に時間をかけて写し取った作家の行為と思想の痕跡、そして公開後に作品と知らず歩いた人たちの足跡もそのまま残した、24枚の和紙である。

「作品の全体は、特定の場と時間に分かち難く結びついて成立するというその性質上、完全な形での再構成あるいは再展示は困難である」とのコメントと、展示する際の指示書を添えて、「素材＝資料」として買上に応じたのだ。

作品を未来へつなぐ美術館の使命を考察した「早佐織物工場」の資料コーナー（同館3階で）

その後、同工場は解体され、作家は死去。再現は一層困難になった。今回の展示では、「桐生再演」に参加したアーティスト黒川未来夫さんの写真、大村雄一郎さん撮影の映像が添えられた。

また現在も桐生市境野町の山治織物工場で活動を継続する西村雄輔さん（同大准教授）、琉球大学に赴任した上村さんのパートナーでアーティストの平良亜弥さんのコメントも掲示。美術家・教育者としての功績と、桐生と沖縄での無形の継承を明示している。